

佐賀県重要文化財

旧三菱合資会社唐津支店本館特別公開



【名称】旧三菱合資会社唐津支店本館
(唐津市歴史民俗資料館)

【所在地】佐賀県唐津市海岸通 7181 番地

【構造】木造 2 階建て、入母屋造り

【規模】面積：1 階 約 428 m²、2 階 約 413 m²

【建築年】明治 41 年 (1908)

【設計】三菱丸ノ内建築所

【施工】神戸三菱建築事務所

＜唐津の近代を物語る大型木造洋風建築＞

旧三菱合資会社唐津支店本館は、明治中期から松浦川河口に替わる石炭の積出港として、港湾や鉄道の整備が進められていた唐津西港（妙見浦）の埋立地に、石炭を販売する事務所として明治 41 年 (1908) に建てられました。

木造 2 階建ての洋風建築で、海に面する東側と北側には 1・2 階ともにベランダがあります。建物のデザインは、ハーフティンバー⁽¹⁾ 様式を基調としていますが、大屋根は日本の伝統的な入母屋造り⁽²⁾ です。また、屋根には急勾配の塔屋根の両脇に千鳥破風を配し、正面玄関には三面破風屋根の車寄せが付きます。

内部は、1 階の玄関ホールと廊下がテラゾー⁽³⁾ 仕上げで、他はすべて縁甲板張です。天井は、1 階を各部屋ごとに異なるデザインの格天井とし、2 階は打上げ天井です。建物の四方すべての側面には、縦長の上げ下げ窓がバランスよく配され、各部屋から外を望むことができます。実用的な事務所であったため内部は簡素ですが、階段部分に施された透かし彫りの装飾や、玄関には彩色されたテラゾー模様など、控えめですが洗練された装飾がみられます。

設計は三菱丸ノ内建築所（当時の所長：保岡勝也⁽⁴⁾、顧問：曾禰達蔵）です。設計図面には、関東大震災後、昭和の建築界を牽引した内田祥三⁽⁵⁾ の印があり、若き日の内田が唐津支店の設計に携わったことがわかります。また、顧問の曾禰達蔵は唐津藩出身で、おなじく唐津出身の辰野金吾とともに最初期の日本人西洋建築家として活躍した人物です。

三菱が昭和初期に唐津炭田から撤退したのちは、海上保安庁などが使用していましたが、昭和 47 年 (1972) に唐津市の所有になり、昭和 54 年 (1979) の修理によりほぼ創建当初の姿に戻りました。屋根、床、基礎、内装、ベランダなどに特色があり、往時隆盛を誇っていた三菱の様相をほうふつとさせる県内に数少ない明治時代の木造洋風建造物として大変貴重であることから、昭和 55 年 (1980) に佐賀県重要文化財に指定されました。

昭和 54 年から歴史民俗資料館として利用されていますが、現在は利活用検討中のため休館しています。

(1) ハーフティンバー：柱や梁、筋交いなどの木部を外に見せ、その間を化粧漆喰で仕上げる。イギリスなどヨーロッパの北側の住宅建築などに用いられた。

(2) 入母屋造り：上半分が切妻造り、下半分が寄棟造りの形式。神社仏閣、城郭建築などでみられる。

(3) テラゾー：大理石などを細かく砕いてセメントに混ぜて固め、磨いて大理石のように仕上げる。

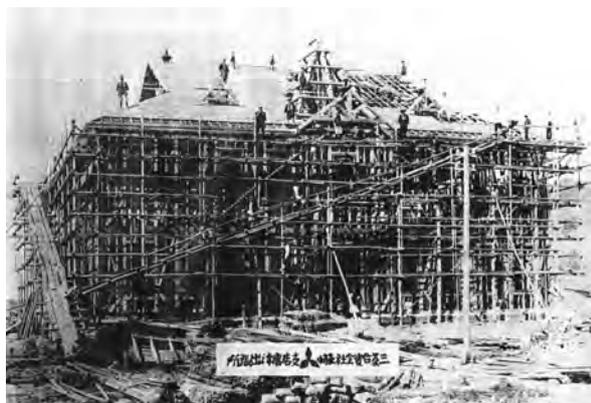
(4) 保岡勝也：曾禰達蔵の後継として三菱のオフィスビルを手がける。三菱退社後は、住宅作家として活躍。

(5) 内田祥三：明治 43 年に東大に戻り、鉄筋コンクリート構造学の研究に従事。関東大震災後は安田講堂建設など東京大学構内の復旧にもつとめた。昭和の建築界を牽引し、幅広い分野に功績を残している。

<唐津港の一等地に建つ>

旧三菱合資会社唐津支店本館のベランダからは唐津港が一望でき、石炭が鉄道で大島の貯炭場へ運ばれ、次々と船で各地へ積み出されていく様子が手に取るようにわかる絶好の立地でした。

この土地の埋め立ては、当初唐津村が着手し、その後、中澤久吉が工事を進めていましたが、経済の変動により資金繰りが難しくなっていたところ、この事業に理解を示した大島小太郎（唐津銀行頭取、鉄道の敷設や唐津港築港など社会基盤の整備にも尽力）が工事をそのまま引き継ぎ、無事完了しました。その後、三菱が埋立地を買収し、護岸石垣、防波堤の修築を行い、現在の建物が明治41年（1908年）9月に竣工しました。現在、かもめ橋からは当時の護岸を見ることができます。

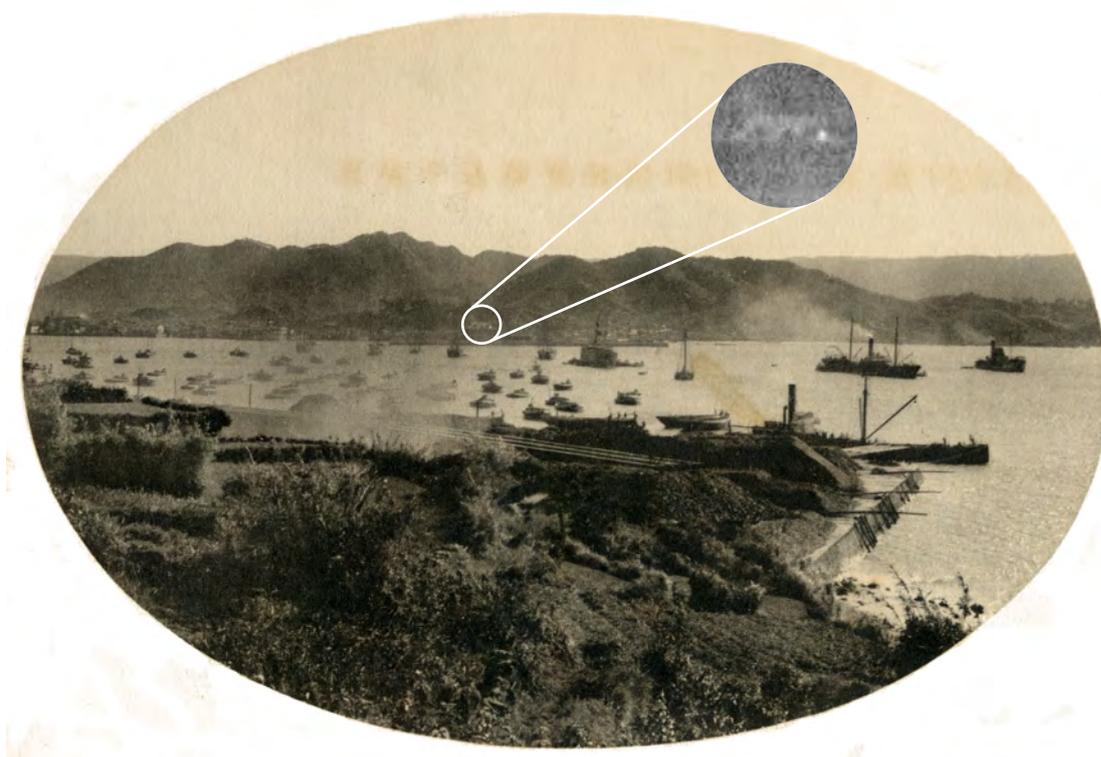


建設中の様子

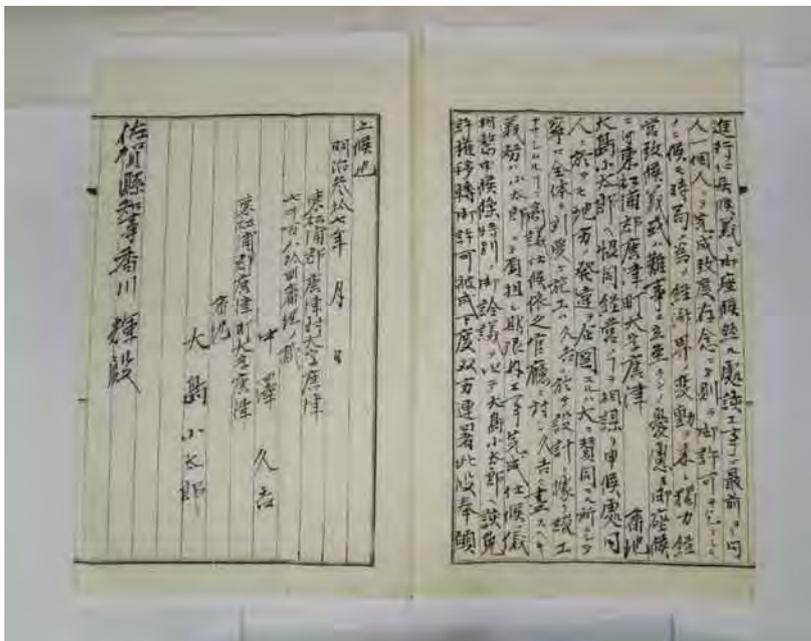


昭和初期の様子

【三菱唐津鉱業所写真帖（昭和4年発行）より】



昭和初め頃の唐津港【三菱唐津鉱業所写真帖（昭和4年発行）より】
○印のところに旧三菱合資会社唐津支店本館が写っています。



中澤久吉から大島小太郎
への埋立免許権の移転願
(大島家文書)
【唐津市近代図書館蔵】



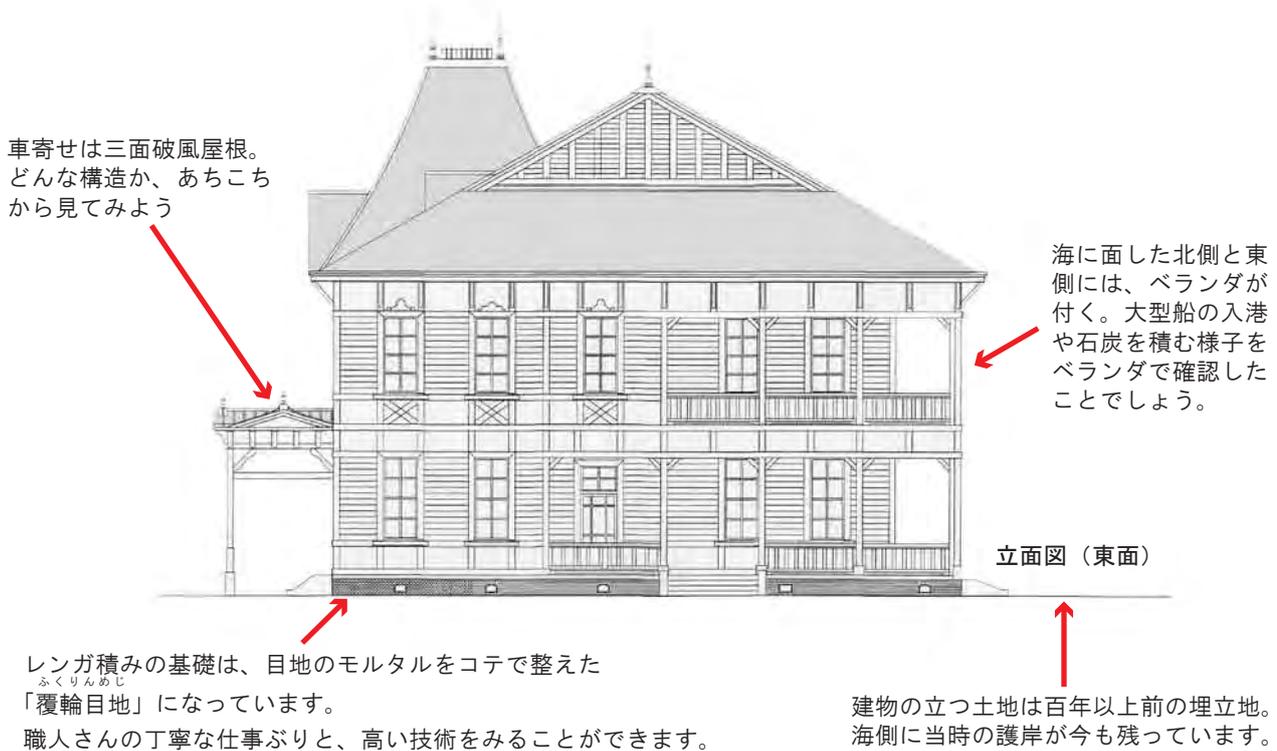
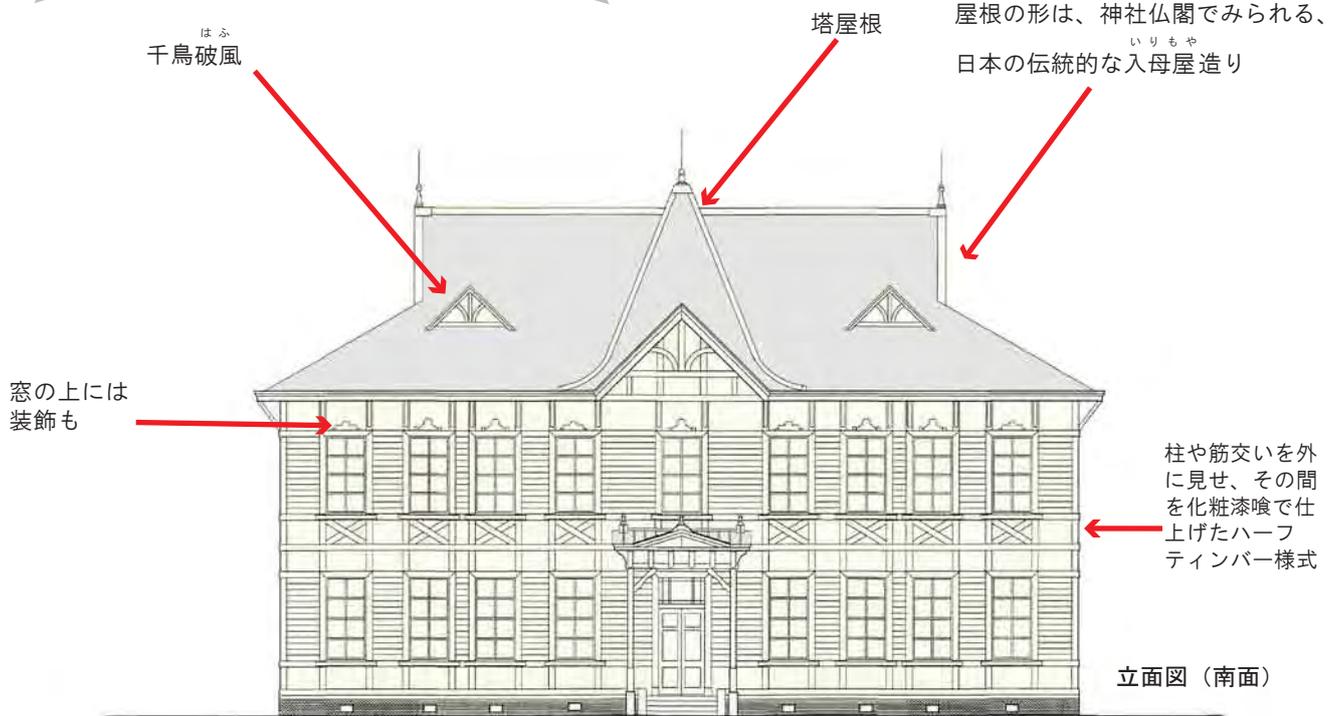
明治後期の西唐津港【国立国会図書館ウェブサイトより】



当時の護岸が今も残る（北東より）

旧三菱合資会社唐津支店本館は百年以上前に建てられた建物ですが、今でも色あせない洗練されたデザインや、高い技術が秘められています。じっくり見てみると、いろんなどころにおもしろいものが見つかるかも・・・

外観を見てみよう



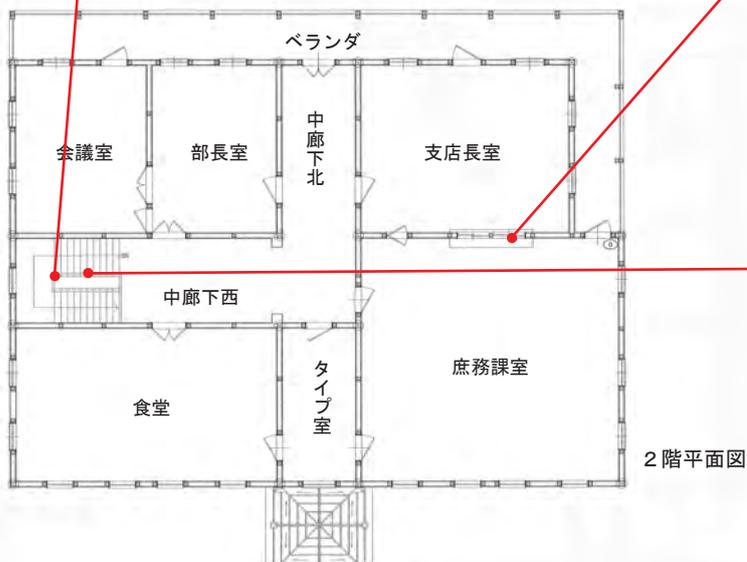
内部を見てみよう



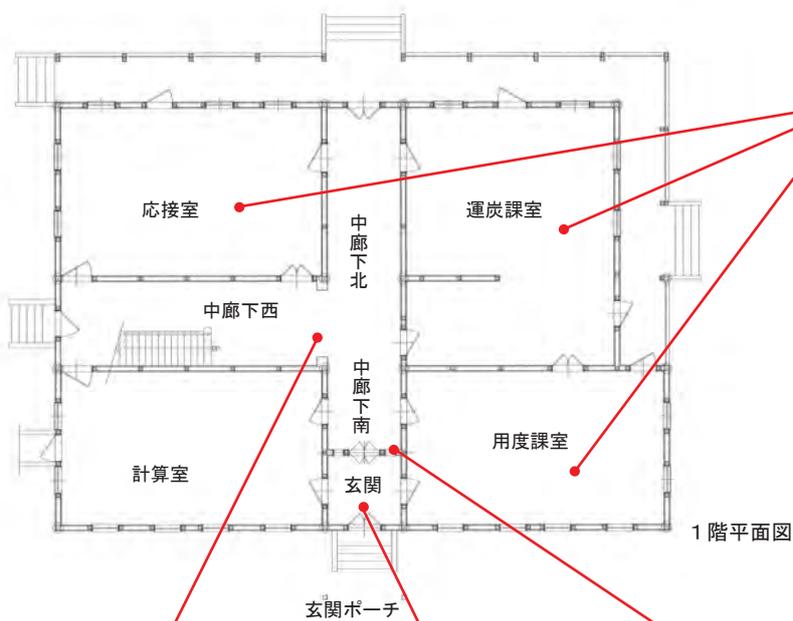
先端の丸いのは松ぼっくり？
いいえ、アカンサス（西洋アザミ）のつぼみのようなのです。



木製の勘定台はシンプルな装飾で重厚な雰囲気。



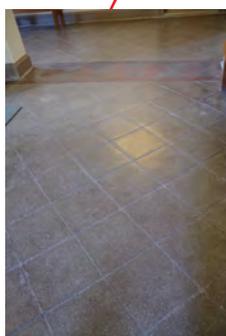
すかし模様は、よく見ると少しずつ模様が変わります。設計段階で実寸代の図面をつくり製作されています。



3部屋とも天井の様子が異なります。



照明器具は草花をモチーフにした曲線が美しいアールヌーボー調。



タイル？石？
実は、大理石の粉をセメントに混ぜて磨いて仕上げたものです。



ひっそりと施された装飾を探してください。

<旧三菱合資会社唐津支店本館 建築の背景 ～唐津炭田の繁栄～>

明治初期の状況

唐津炭田は、唐津市の18世紀の初めに偶然に発見され、幕末～明治初めにかけて、全国の石炭の産出量の約30%をしめるほど繁栄しました。明治4年(1871)に、薩摩藩をはじめ各藩から献納された軍艦によって発足した海軍は、これら蒸気船の燃料を、当時最大の産炭地であった唐津炭田に求めました。明治4年(1871)に旧薩摩藩の炭鉱を中心に兵部省の直轄炭鉱が創設され、管理のために唐津海軍出張所が設置されました。さらに、明治12年(1879)には、民営炭鉱借区の20数倍にあたる広大な未着手の坑区が海軍予備炭山となりました。このことは、一方では民間の炭鉱開発に遅れを生じさせることになりました。また、筑豊炭田の石炭輸送が川舟から鉄道へと移行するに従い、石炭の運搬料が安いという唐津炭田の優位性は薄れ、採炭の中心が筑豊へと移行していくことになりました。

唐津炭田の近代化

唐津の炭鉱の近代化は、竹内綱^{つな}、明太郎親子や高取伊好^{これよし}らが唐津炭田に進出したことに始まります。竹内綱は、明治18年(1885)に唐津市北波多の芳谷炭鉱会社を設立し、高取伊好を技師長として開発に乗り出しました。その後まもなく息子の明太郎に経営を引き継ぎますが、唐津炭田において最初に近代化した炭鉱として、芳谷炭鉱は大きく発展しました。さらに、高取伊好^{おうち}は相知炭鉱の開発に乗り出しますが、明治32年には相知炭鉱、明治45年には芳谷炭鉱が三菱に買収されました。さらに貝島など他の石炭大手も進出し、さらに発展していきました。現在では唐津炭田の繁栄をうかがわせるものは少なくなっていますが、高取伊好の屋敷であった旧高取邸や、三菱の事務所であった唐津市歴史民俗資料館(旧三菱合資会社唐津支店)などの現在に残された建物が当時の繁栄を物語っています。



芳谷炭鉱(大正末期)
唐津市北波多

相知炭鉱
(昭和初期)
唐津市相知町



<唐津に残る近代遺産>

旧高取邸（国重要文財）

旧高取邸は、芳谷炭坑、相知炭鉱を経て杵島炭鉱などの炭鉱主として成功した高取伊好（1850～1927）の旧宅です。建物は接客空間である大広間棟と、居住空間である居室棟に分かれており、大広間棟は明治38年（1905）、居室棟は大正7年（1918）頃の建築です。その後細かい増築が繰り返され昭和初期に現在の規模になりました。和風を基調としながら洋間を持つなど同時代の邸宅の特色を備える一方、能舞台を設けるなど他に類を見ない構成を持つ点に特徴があります。くわえて、各部の意匠のすばらしさが高く評価され、平成10年12月に国の重要文化財の指定を受けました。



旧唐津銀行本店〈辰野金吾記念館〉（県重要文化財）

大島小太郎が頭取であった唐津銀行が、本店として明治45年（1912）に建てた建物です。設計は、大島小太郎と耐恒寮とともに学んだ辰野金吾の監修のもと、その教え子の清水組（現在の清水建設）技師田中実が行いました。外観には「辰野式」の建築表現が用いられていますが、通りに面する壁面を白い色モルタル壁で覆う点や連続する半円形アーチで飾る意匠は、辰野が建築家として活動した前期と後期の建築様式の融合を図るとともに、壁面にリズムと華やかさを加えた田中のデザイン力が窺えます。

旧大島邸

旧大島邸は、唐津の近代化に尽力した大島小太郎の旧宅です。現在地から300mほど西側の地点に建てていましたが、小学校校舎の建設に伴い解体され、現在の地に復原されました。

母屋の完成は明治26年（1893）と考えられており、明治時代中期の大規模かつ上質な住宅で、当時の和風住宅の庭をとともなう建物構成や意匠の優秀さ、特徴をよく示している建物といえます。



